LUNA SEA

RYUICHI SUGIZO INORAN J SHINYA

"AFTER the IMAGE" in 渋谷公会堂

アルバム・リリース、全国ツアー、ビデオ・リリース、夏のイヴェント、
そしてまたツアーと、無謀なまでにハードなスケジュールを自ら敢えて選ぶ彼ら。
ともかく常にファンの顔を見ていないと気が済まないらしいLUNA SEAの"AFTER the IMAGEツアー"が、
ついに東京を直撃した。アンコールでは新曲も披露され、最前列から二階席の後ろまで、
ひとりも余すことなく彼らとの空間に染まった熱い一夜のレポート。

熱波に染まって

Text by Hideaki Utsumi Photographs by Saori Tsuji

号外!!

Free Will 期待の11月21日

カップリングツアー決定
11月21日㈯大阪YANTA ROCK-MAY-CAN
11月25日㈬東京インクスティック鈴江FACTORY
11月26日㈭名古屋Music Farm

WAITING FOR NO ONE
DIP THE FLAG
・Rare Video

SSE4015（V）50分VHS ￥6000（送料・税込）

12月25日発売予約受付中　完全限定500通販のみの取扱い（店頭では入手できません）

●ヤマジ、イトウ、オオハラのオリジナル・ディップ・ザ・フラッグが残した貴重なライヴ映像とメンバーのオフショット、インタビュー、最新動向を含む永久保存版。通販予約のみの販売。

NOW ON SALE――これを聴かなきゃダメだ。

計10ユニットによるあまりにも多様なバンド・ミュージックの嵐！GALAXシリーズの最高作早くも品切間近!!

SSE4013CD ￥2700（税込）

01 DIP/My Sleepstays Over You
02 WARM/Gathering Dust
03 エレキ・ブラン/ソエギの恋愛
04 POETIC LANDSCAPE/キャロル
05 DIFFERANCE/道
06 CAMERA/雷～トゥーサン
07 とんび/おまえのピストルには弾があるのか
08 REAL BIRTHDAY/I Wannabe Your Dog
09 GAZELLE/One Fine Day
10 発狂一直線/シュプール男爵

Total Time 69：12

SCHWARZWALD
黒百合姉妹 VIDEO

SSE4014（V）￥6000（送料＆税込）

黒百合姉妹、初のライヴ＆イメージ・ドキュメント。自然界へのスピリチュアルな憧憬が感動的。残数極少。

妖花

ヘヴィネス＆メロディアス 2面性の凶器を持って

デカメロンのローディーたちが意気投合して生まれたこのバンド。
1年前から積極的なライヴ活動を繰り返し、
その中で現メンバー 女璃衣（Vo）、KAI（G）、蕘一（B）、ASAOMI（Dr）で1st CDをリリースする。
バンド結成から約2年、常にマイペースで突き進んできた彼らに、初のインタヴューを試みた。

インタヴュー・構成＝東條祥恵
interview & text by Sachie Tohjyoh
撮影＝辻砂織
photographs by Saori Tsuji

―まずはバンド結成から現在に至るまでのメンバーとの出会を教えて下さい。

女瑠衣：結成は2年ぐらい前に。デカメロンのローディーその時やっていた玉水っ奴と勢いでやって、ドラムのASAOMIと出会って東京に出てきて、メンバー募集でギターのKAIが入って、今年の6月にKAIと同級生の蕘一が新しく入りました。

―バンド名の由来は？　辞書でひくと、美しく咲く妖しい花という意味でしたが。

女瑠衣：京都にいる時のメンバーで、名前を京都っぽいのにしようということになって。ひらがなとかは〝かまいたち〟さんがいたので、漢字にしようということになって。パラパラ本をめくっていたら妖花という文字が出てきたんです。

―今のメンバーも全員関西出身なのですか？

女瑠衣：いや、僕だけです。あとは関東勢と茨城勢で。

KAI：茨城は関東でいいの(笑)。

―4人の性格というのは？

女瑠衣：コイツ(KAI)はいろいろと案を出してくる。こうしよう、ああしよう。これじゃダメだとか、そういうタイプ。蕘一は今のところバンドに関してはおとなしい。ASAOMIはお父さん的存在(笑)。僕はおちゃらけです。

KAI：でも怒ったり、笑ったり激しいんですよ。

―楽曲の制作担当は？

女瑠衣：曲を作るのはギターのKAIで、詞は僕が。

―初めてのライヴは？

女瑠衣：2年前の10月30日にデカメロンのライヴで前座をやらせていただきました。そのときはローディーをやってまして。オリジナルをやりました。

―その当時の音楽性は？

女瑠衣：今回のアルバムにも入っているんですけど、「アロンタイム」や「クラッシュ」。「クラッシュ」はコア系の曲で「アロン〜」は勢い重視のハード歌謡曲みたいな。

ASAOMI：歌謡曲か(笑)？

―そもそも各メンバーの音楽的バックボーンというのは？

女瑠衣：僕はパンクです。

ASAOMI：僕は何でもいいけど、とりあえず速くてノリがいいのが好きです。すごい印象に残っているのは〝REACTION〟っていうバンドで、ズキ〜ンときました。

KAI：最初に入ったのは歌謡曲から。アイドルからそのうちバンド関係に入って、パンクや日本のインディーズを聴いて。僕はアメリカンHRやヨーロッパものや。

女瑠衣：結局ジャンルないねんな。

KAI：その中でも中学の時に聴いたスターリンやラフィンやガスタンクは強烈でした。

蕘一：僕はポップ系というか…。

KAI：一応一緒につるんでたんで、聴いてるものは俺と同じなんですよ。

―各自バラバラの音楽性の中での共通項というのは何なんですか？

女瑠衣：とりあえずメロディー…だよね。

KAI：最初の頃は重くて速くて激しくてというのを強調してたんですけど、けっこうまともなライヴ活動をしはじめて変わってきた。

―それはいつ頃から？

女瑠衣：去年から、月2〜3本のペースで。

KAI：東京にきてから以前作っていた曲とぜんぜん違う雰囲気の曲が出来るようになって。今回のアルバムにはアコギとか使った静かな曲を入れたり。

女瑠衣：最近の新しい曲もファンのウケはいいんですよ。前はやっぱり重たくて速いとある程度メロディーの範囲も限られてたんですよ。それが新しいタイプの曲では、起伏に富んだメロディーがつけられたり。

―それはKAIさんとのコミュニケーションで？

KAI：曲によってはヴォーカルを重視する相談をするようになりました。

―その変化はライヴをやってきたことの成果なのですか？

女瑠衣：それ以上に去年のライヴを通して、変な言い方だけど、残っていくバンドはやっぱり実力とかありましたし。ライヴでの表現力とか演奏力はつけなきゃというのは学びましたね。

ASAOMI：たえずいろんな刺激を受けました。自分たちに足りないものとかがどんどん見えてきたと思う。対バンとかをやらせてもらって。

―自分たちの音楽性に関しては、そのような中で、まだまだ試行錯誤してる段階？

女瑠衣：どんどん拡がっていけばいいかなと。形になるべく時がきたら形になって。

―その拡がりをもたせるためにも、ベースとなる根本の音楽性はあったほうがいいという気もしますが？

女瑠衣：それは本筋としてもちろん通して。

―その本筋というのは？

女瑠衣：やっぱり、今だに速い、重いは…。

―なるほど。それで今回初のアルバムがリリースされるわけだけど。タイトルというのは決まりました？

KAI：『SEEK』という。僕が案を出したんですけど。

女瑠衣：バンドを通して、レコーディングを通して何かを探したいというのを正直に。

―収録曲は何曲ぐらいになりそう？

KAI：今のところ10曲。ライヴで今までやってきた曲と新曲を2〜3曲。

女瑠衣：いろんなタイプの曲がありすぎて、〝どうしていいかわからん〟とエンジニアの人に言われました(笑)。妖花の成長過程として捉えてもらえればと思います。

―トータル的に見ると、どのようなアルバムになりそうですか？

女瑠衣：重たいといえば重たい、メロディアスといえばメロディアス。その2面性を出しました。

―詞に関しては？

女瑠衣：何かを伝えたいというメッセージ性は今のところないです。ただ、詞を書くとき僕は陰に籠もるんで、自己嫌悪というかそういうカラーは全体にあると思います。その辺は受け手にどう捉えてもらってもいいんで。ホンマ歌詞カードなんかいらんわい、と思うくらいで。

―去年のライヴ活動を通して、そろそろアルバムをという雰囲気にバンドもなってきたからこそのCDリリースになったのですか？

女瑠衣：そうですね。形を1回まとめたいというか、来るべくして来たというか。

―アルバムをひっさげてのツアーも決まっているようですが？

KAI：新曲と古いナンバーをゴチャゴチャとりまぜてのライヴになりそうです。

―今後の目標は？

KAI：〝SEEK〟です(笑)。正直いっちゃえばどこかの場所でやりたいとか、ありますけど。それ以前に現在やってることというか、目の前にあることで一杯になっちゃうんで。

女瑠衣：作戦を立てつつ、地固めってとこですか。

―まだまだ地固めが必要であると。

女瑠衣：正直いってそうです。

―それはサウンド的な部分で？

KAI：だから、あるときは静かであるときはバーッといって。そういう起伏の激しさを追求したいです。

女瑠衣：妖花っちゅうことは、ごっつく自分らでは捉えているんです。だからその中で何をやってもええ、みたいな。今これもやれる、あれもやりたいって。それを妖花を通して妖花らしさを出すという。

ASAOMI：だから本当にマイペース。

KAI：1年ぐらい前は考えばかりが先走って実際にやることと考えてることが違ってたりしましたよ。今でもたまにありますけど。

―今は考えてることに実力が追いついたと。

KAI：2、3歩ですけどね。

ASAOMI：ぼちぼちと。

女瑠衣：欲張りやから一杯試してみたくなって、5つ失敗を重ねては繰り返し反省する若者達って感じかな(笑)。

―蕘一さんは一番最後にこのバンドに入ったわけだけど、今日話していただいた妖花の変化に関してはどう感じてますか？

蕘一：僕が入ってから変わりましたね。曲にしても、新しく出来た曲とかだいぶ聴きとりやすくなったっていうか。

―妖花にとって現在のライバルは？

女瑠衣：やっぱりフリーウィルのバンドには負けたくないなと。ライバルとは言えへんけど、頑張って抜きたいな。バンドやってるもん同士、歌個人でいえば歌う者同士、向こうに出来てこっちに出来へんことがあったら、向こうが出来へんことをバンバンやって。認められたいというのもありますし。

―当面の目標というと？

女瑠衣：具体的にあげればワンマンです。

―それでは最後に読者に対してメッセージをお願いします。

KAI：CDを出したらライヴに重点を置きたいんで。ライヴ全体の雰囲気とかも、もっとテンション高くして、一体感のあるライヴをやっていきたいです。

蕘一：ライヴはCDのプレイを再現できるように頑張りたいです。

ASAOMI：メンバーも代わってCD作ってライヴやるわけだから、気持ちを切り替えて。最近おとなしいライヴが続いていたから、ヴォーカルに負けないように(笑)自分自身をもっと盛り上げて、ライヴに望みたいです。

女瑠衣：CDはCDで妖花ですし、ライヴはライヴで妖花ですし。特にCDから入った人にはライヴは観て欲しいですね。

前列左から、女璃衣（Vo）、蕘一（B）、
後列左から、ASAOMI（Dr）、KAI（G）

イル・ボーン特に箕輪のドラムスには、70年代後半にひとつのピークを迎えたフリー・ジャズ、フリー・ミュージックの即興イディオムが息づいていて、これは同じ即興でもノイズやジャンクのそれとはまったく異質であることがわかる。またそうした要素を、抒情というきわめてとりとめのない感覚の介在によって抑制するのではなく、反対にこの2つがさらにアグレッシヴな対決へと発展しながら到達したのが、イル・ボーンの音楽だった。ちなみに「イル・ボン」とは朝鮮語で「日本人」。

◎ソドム『TV・MURDER』

ハードコア・パンク→ポジティヴ・パンク→ハウスと、幾度となく音楽的転身を図ったソドムの歴史のなかで、『TVマーダー』の占める位置はちょうど時代の境い目にあたるといっていい。それは翌年にリリースされた『マテリアル・フラワー』が、テクノやハウスへの兆しをうかがわせるキャッチーな作品であったことからもうなづけるが、彼らのこうした変転は、むしろ80年代のロック・ミュージシャンの凡世界的な現象であり、例えばイギリスのクラブ・シーンにも元パンク、ポジ・パンや元ノイズ・ミュージシャンの経歴をもつ者はやたらと多い。85年にリリースされたトランスの事実上の第1作目『TVマーダー』が当時のシーンに与えた衝激は目をみはるものがあり、しかもこの内容の強烈さは前期ソドムの徹底した姿勢とその完成度の高さが生み出したものだった。「日本のバースディ・パーティ」といわれたワイルドでエネルギッシュなザジのヴォーカルとステージ・アクションですでにポジ・パン系のバンドの中心的存在だった彼らだが、加えて『TVマーダー』には、エレクトリック・ドラムスやノイズ・インダストリアル・ツールを用いた重厚で冷たい感触、いわゆるサイバーな世界が広がっていて、そのスケールの大きさはもはやポジ・パンの領域を完全に超越した未知の迫力にみなぎっていたのだった。彼らは直観的バンドだったといえるだろう。エネルギーをよりダイナミックに表出するためのシステムとしてさまざまな表現手法を直観的に吸収し試るのに長けていた。85年当時このアルバムは、ウイラードのデビュー盤の後を受けてインディー・チャートのトップに立ち、初

DJの中にも、ソドムの影響を口にする者がたくさんいる。

◎YBO^2『ALIENATION』『LIVE BOOTLEG』

85年の7月にギタリストNULL、9月に当時パイディア、あぶらだこのドラマーだった吉田達也が参加してトリオ形態になったYBO^{2}は、その年の暮れにシングル『ドグラマグラ』をリリースして即時完売、スーパー・グループの歩みがここから始まる。86年5月にリリースされたファースト・アルバム『ALIENATION』は、この種の音楽では奇怪ともいえる破格のセールス(89年までにトータル15000プレス・現在入手不能)をあげ、インディーズ・シーンのワクを遥かに超えた多様な階層の音楽ファンにアピールした作品だ。映画「地獄の黙示録」とディズニー・ランドの異様な類縁性に触れたボードリヤールのアメリカ論から生まれた〝アメリカ〟や、『狂気の歴史』に登場する中世の精神病院について歌われたイギリス民謡〝Boys of Bedlam〟など84年の結成当初からのナンバーをはじめ、今なら一種のラップというべきかもしれない〝猟奇歌〟や〝ドグラマグラ〟といった一連の夢野久作モノは、80年代後半のサイバー・カルチュアやシミュレーショニズムを完全に先取りし、ダイナミックにサウンド化した初めてのロック・ミュージックといっていい。

思考や記憶の断片をそのまま音楽の素材や表現方法へとダイレクトに移動させてしまう北村昌士の技術が、これまでのロック・ミュージシャンとは完全に違う世界の文化を背負っていたことだけは確かだった。

86～87年はトランスレコーズのみならず、〈インディーズ〉全体のマーケットが急速に膨張したことで、ライヴハウスやイヴェントの体質が大きく変わり始めた時期でもあった。大手の資金で運営されるインディー・レーベル、ハードコア・パンクのしめ出しを行なうライヴハウス、プロのイヴェンターが管理するインディーズ・イヴェントなど、本末転倒なでき事が当たり前になり、金になるからという理由だけでインディーズに関わろうとするブローカーまがいの人物が横行した。YBO^{2}は86年にギタリストをNULLからルインズの河本にチェンジし、こうした状況に強力

leg』はライヴ・テンションの最も高かった87年に収録され、河本の脱退が決定した88年初頭にリリースされている。

◎V.A/EP-COMPS

トランスでEPレコードしか出していない3バンドの作品が1枚のCDに収められている。トップは、今やフールズ・メイトでXの次くらいに有名なボアダムズ。このEPは86年にリリースされたボアダムズのファーストにあたるが、当時は「ハナタラシの山塚」がメディアの通り名だったせいもありより音楽的なボアダムズに対する関心は低かった。これに先がけオムニバス『NG』に1曲、また87年の『NGⅡ』には、オフマスクのアキイと組んだエルビス・ダストの作品が1曲入っている。タイムリーにもフールズ先月号に膨大な特集が掲載されているので詳細はそちらを参照。

今は存在しないツァイトリッヒ・ベルゲルターは、ポジ・パン中心の85年のライヴ・シーンでいち早くポスト・インダストリアルなライヴ・パフォーマンスを実践して注目を浴びたが、メンバー特にこの手の音楽で最も大事なドラムスのポジションが流動的だったのが災いして陽の目を見るに至らなかった。ソフトバレエのフジイが在籍したことでも知られるツァイトリッヒの唯一のEPは、ノイバウテンやテスト・デプトでガンガン盛り上がっていたヨーロッパの状況にシフトした強烈なメタルパーカッションにワイルドなヴォーカルが絡むという本格的なものだった。

幻覚マイムの『Butterfly』というEPは87年にリリースされているが、バンド自体はすでに太陽レコードから1枚作品をリリースして、ライヴ・シーンでもそのがっしりとまとまった演奏力で高い評価を得ていた。腰のある幽太郎のヴォーカルが正統ロック的で力強く、キメの多いアクセントのある演奏と交錯してさまざまな光彩を放った。88年に突然解散したのが惜しまれる。

◎ASYLUM/CRYSTAL DAYS

ガゼル(Vo)、キシザワ(Dr)、アリガ(B)、アキ(G)のオリジナル・アサイラムは、86年に『Asylum』『Out in the Streets』の2枚のE

ド・ロック。アコースティックな演奏もすばらしかった。そしてなによりも歌。ガゼルのヴォーカルは、ついついわめくだけになってしまいがちなこの手の音楽にあって、どんな曲でもそこに歌があることを忘れさせない。そんな彼らが総力を結集してつくり上げたのが、87年のデビュー・アルバム『Crystal Days』だった。アコースティックな弾き語りからヘヴィなヴァージョンまで、多様な楽曲をひとつにまとめ上げ、ストーリーをもったトータル・アルバムのような印象を与えるこの作品の完成度はきわめて高く、オリジナリティーの面でも同世代の他のバンドを完全に圧倒している。インディーズのマーケットの巨大化も手伝い、このアルバムは87年のベスト・セラーとなって品切れ→再プレスをくり返した。

おりしもビート・パンクの全盛期が始まろうというなかで、それらとはまったく異質の表現で強固な支持をかちとったアサイラムの存在は、次の世代に対しても大きな影響力をもったはずである。サウンドのヴァリエイションや作曲に関する才能は、80年代後半の最も良質なレベルに属することはまちがいなく、そこには時代に左右されない普遍性があったことを『Crystal Days』は教えてくれるだろう。時を越えて生きるものとそうでないものがあり、そのことが判明するのは、それが生まれた当初ではなく、ずっと後のことになる。これは音楽に限らずすべての表現に関していえることだ。だから世界はアホらしい。

◎ZOA『Off Black』

87年にトランスからリリースされた始めてのEP『Off Black』は、ヴォーカル森川誠一郎の一大苦難を乗り超えたことの証しだった。前年すでにアルバム・リリースが決まっていたにもかかわらず、主要メンバーの2人がソドムに引き抜かれるという大アクシデント。森川はYBO^{2}を手伝いながらすべてのメンバーを捜さなくてはならなくなり、長い活動休止におちいった。

復活したZOAのパーンネルは森川(Vo)、黒木(G)、カンスケ(B)、野島(Dr)。『Off Black』のリリースを皮切りに、ツアーを含む大ハードなライヴ活動を展開し、たちまちシーンのトップ・クラスに駆け上ってゆく。キング・クリムゾンをパンクに曲解したようなZOAのサウンドは、変則的でありながらストレー

もバンドのハイ・テンション、ハイ・テクニックに拍車をかけた。

『Off Black』は、硬質なギター・リフを核に強力なリズム・セクションとアグレッシヴなヴォーカルが炸裂する最もハードな内容の作品で、数あるZOAの作品の中でもベストに挙げる人は多い。ダイナミズムという点で初期ZOAの存在感は圧倒的だったし、ライヴでの表現に彼らほど真険だったバンドもいなかった。88年にEP〝Flow Deep Sorrow〟をリリースした後、待望のファースト・アルバム『HUMANICAL GARDEN』が登場。ZOAは押しも押されぬインディーズのトップ・グループとして君臨する。ちなみにボーナス・トラックの〝豚の神様〟は長い間高価プレミア付で売られていた非売品ソノシートからの収録。

◎RUINS『Ⅱ & Ⅰ』

パイディア、あぶらだこ、そしてYBO^{2}と名だたるバンドに在籍し、その途方もないパワーとテクニックで名をはせたドラマー吉田達也のリーダー・ユニットRUINSは、ベースとドラムの2人だけという恐るべき編成で85年ごろ始まった。ベースにはギターのようなエフェクターがかけられ、そして吉田のヴォイス。音の不足感はまったくなく、むしろ過剰にさえ聴こえるから驚きだ。ファーストEPは86年の作品。ドラムスのアタック音をわざと歪ませるために、PAからメタル・カセット・テープにライン録音されている。フランスのマグマ、イタリアのアレア、そしてイギリスのディス・ヒートと、それぞれが天才的なドラマーを擁した往年のプログレッシヴなロック・グループをこよなく愛する吉田の音楽世界では、変拍子も奇怪なヴォーカルもバカテクも、まったくもってあたりまえのでき事なのだった。

セカンド作『Ⅱ』は正規のマルチトラックレコーダーで録音されたクリアーな内容の作品で、ギターやキーボードもダビングされききやすいつくりになっている。現在のインディーズには、こうした怪物的なミュージシャンの育つ素地が年々少なくなっているのは嘆かわしいことである。強烈なインパクトで独自のポジションを占有するRUINSは、海外での評価も高い。88年にアルバム『Ⅲ』リリース。ベースは河本から記本にかわった。

Living Loving

妖花

未完な大器

8・5　目黒鹿鳴館

ファースト・アルバム『SEEK』のリリースで、そのコアな音楽性を見せつけた妖花が8月5日、結成3周年記念ライヴを行った。妖花のライヴをフルに観るのは久し振りで、それと言うのも(かなり前の話で恐縮だが)深夜のTV番組に出演していた頃の印象がどうしても抜けずにいてライヴに足を運ぶのを怠っていたのだ。しかしこの日のステージを観た後には、そんな気持ちも改めなければいけないことを悟った。

会場が暗くなった瞬間、怒濤の様な歓声が沸き起こり、しょっぱなから「LIGHT & SHADOW」「I・H・Y」とスピーディなナンバーで観客の少女たちをヘッド・バンギングの嵐にしてしまうステージ上の4人のメンバー。ヴィジュアルから受けるイメージとは逆の、力強ささえ感じさせる演奏を叩き付けていく。

〝みんなありがとう。今日は新曲も含めて、妖花が3年間やってきたことを全部出します。俺らの曲を全部おまえらにあげるから、今の俺らを目に焼きつけて……思いっ切り来いよ！ かかって来いよ！」——ヴォーカルの女璃衣のMCに煽られて、我を忘れたかの様に頭を振りまくる客席は壮観だ。中盤にはミドル・テンポの曲が続き、ギターとヴォーカルのみのバラード・ナンバー、さらにはギター・ソロ、そして後半には再びアグレッシヴにと、ワンマンならでは趣向をこらしたステージを披露してくれた。激情と柔らかな焦燥間を交互に噛み合せながら展開したアンコールを含む約1時間30分のステージは、幾分散漫にも思われがちなサウンドを、彼らがいかに自分たちのものとしていこうとしているのかを認識させると共に、妖花の現在の姿形を見せつけてくれたものだった。彼らの音楽には荒削りな未完成さをも武器にしてしまう力があり、まだまだ発展させる余地もありそうだ。今後の活躍に期待していたい。

(文・撮影＝加納一美)

ハイテクノロジー・スーサイド

ゴーモンのススメ

8・11　渋谷クラブクアトロ

レーベル側の倒産というアクシデントで、CDリリース、そして発売記念を兼ねた東名阪クアトロでの市民、ハイテクのカップリングCDシングル無料配布ギグ〝アナーキー・イン・ザ・ブラックホール・ツアー'93〟の実行が非常にデンジャラスな状態に陥っているといった噂もあったが、バンド側のDO IT YOURSELFな精神で、イベントも、CDリリースも無事に敢行された。

この日、時間的な都合で市民を観ることが出来なかったので、ここでは市民のことは触れることができません、すいません。しかし無事CD『ブラックホール』リリースおめでとうございます。

で、ハイテクだー。サード・アルバム『ブラックホール・アナルのアナーキスト』を7月末に自らのレーベル〝ゴーモン・オフィス〟からリリースし、8月末には元たのきん、グッド・バイ、金八先生にも出演していた野村のヨッチャンがプロデュース&ギターをやってる曲も収録されているCDシングル『死神ゴードン』というドギツイの2連発を放った彼ら。だが、どんなスゲー作品作っても音楽的評価が正当になされていないのは非常に残念であり、そして海外の音楽にしか目を向けない業界特有の外人コンプレックスというものにはどうにかして欲しい毎日だ。かなりゲテモノ的な動きを生で見せている彼らだから、鼻と脳にキちゃった人には単なるイロモノでしかないのだろうが、米・豪のガレージ・パンク・バンドや、サブ・ポップのドワーヴスなんかと同じぐらいのゲテモノ振りを発揮しつつも、サウンドも彼らと同じくらい、いやそれ以上の破壊のボルテージを大行進させているのにダメだ。しっかし海外にはハイテク中毒患者が現在続出しているのだ、お前らは知らんだろうが。

新ドラマーMISA嬢のオナニー・ショウ、ツージーQの生乳一気飲みのアトラクションでスタートしたこの日のライヴだが、イベンター・サイドから〝あまりあばれないで〟と懇願されてしまい、この日100%フル・テンションなステージではなかったようだが、エンディングでは大型剣山下敷きパフォーマンス、ドラム破壊など、ハイテクのライヴに相応しい崩壊さを見せつけてくれた。だが、この日を境にクアトロへの出演は禁止となったそうだ。僕が見てる限り全然デタラメなことやってないのに、何故だろうか、疑問が残るライヴでした。

(文＝桜井羅雷)

INDRAWN STAGE

4匹の鬼

8・29 高円寺20000V

GUMBOIL

HELLCHILD

MULTIPLEX

COCOBAT

「デスメタルでもスラッシュメタルでもない自分達なりの音楽を追求していきたい」、以前こんなことを語っていたヘルチャイルドの初のフル・アルバムがリリースされ、その発売を記念したギグが東京高円寺で行われ、全国から4バンドが集まった。

オープニングを務めたのは札幌のガンボイル。ギターとベースの掛け合いの中からファンク的な味わいが生まれる、ミディアム・テンポのヘヴィ・ロックを聴かせる彼らは、既に自分達のスタイルを確立しており結構聴かせるのだが、水中ゴーグルに殺害塩化系を思わせるしろぬりのメイク、或はMCでみせる〝お馬鹿さん〟的ジョークがサウンドのイメージとマッチしておらず、チグハグな印象を受け少し残念だ。西条秀樹や田原俊彦のモノマネで子供達をわかせた後、アップ・テンポのパンク的なビートを感じさせる曲で終わる。

「グラインドコアをベースに様々な音を取り入れていきたい」、以前こんなことを語っていたマルチプレックスだが、この日の彼らはグラインドというよりも時としてアメリカン・ハードコアをも思わせる、疾走感溢れるラウド・ロックをプレイした。スピードを追求するあまり一曲が単なる音の塊となり逆に疾走感を失ってしまうバンドも見られる中、曲を十分に練ることでスピードと疾走感を両立させ、心地よいサウンドを聴かせたマルチには花丸を送りたい。自信溢れる演奏が実にたくましかった。

マルチプレックスが縦揺れ直下型の激震だとしたら、ココバットは荒波の上の船の様な大きな落差のあるナナメ揺れの大地震といえるかも知れない。ファンク・テイストの感じられるベースと鋭くえぐる様なギターが絡み合うそのサウンドは、必ずしもスピードに頼らずミディアム・テンポで確実に進行し、独特のウネリを生むことに成功している。楽曲としての完成度も素晴らしく、この日のバンドの中では最も音楽的と言えるだろう。トイズファクトリー・レコードから発売された『ストラッグル・アフロディーテ』は必聴だ。

ラストは今回の主役ヘルチャイルド。「差別される屈辱とか不服が、ライヴでもそのまま出ている」、以前こんなことを言っていたヴォーカル原川が発する猛獣の様な原始的雄叫びは、突き詰められた個の激しい衝動に溢れ、時には単なる音楽を越えた〝個の主張〟の様にも僕の目には映る。一方サウンドの方も以前にも増してよりヘヴィにそしてダイナミックにスケール・アップされており、『To The Eden』からの曲もスタジオ・テイクとは比較にならない、強いインパクトを感じさせる。デスメタルでもスラッシュメタルでも何でもよいが、スタイルをなぞるだけの凡百のバンドとは一線を引く、正に〝ロック〟を感じさせるステージであった。

（文＝川口 徹、撮影＝深港まゆみ）